

肉塊

岐山高校 3年

ベンチに座っている私がふと地面を見ると、肉塊が地を這っていた。生レバーのような色味をたたえながら、単細胞生物の如く、にぢり、にぢり、と蠢いていた。

私はなぜかその肉塊にひどく惹かれ、触れたい、という衝動に突き動かされた。手にしていたサンドイッチを素早く口に詰め込み、お茶で流し込む。そしてすぐさま水筒を片付け肉塊へ近づいた。

よくよく観察してみれば、肉塊は細い糸がより集まってできた物のようだった。その証拠に、肉塊が動くたびに、ぐじゅ、と何かと何か擦れる音がしている。太陽光は、繊維によって生まれる凹凸をしっかりと拾っており、ハイライトの形は確かに滑らかな物体にできるそれと比べ明らかに細く歪んでいた。

肉塊は、息をするだけで首筋に汗がにじむような暑さの中放り出されているのにもかかわらず、あたりには腐臭どころか何の臭いも漂っていなかった。その事に酷く違和感を覚えた。もう少しよく見ようと顔を近づけ、つくように指を伸ばした。するとまるで肉塊にだけ風が吹いたかのように表面がさざめき、意志を持ったように蠢いた。

驚いて指を引つ込めると、また元のにぢり動く肉塊へと戻った。思わぬ変化に目を丸くし、そして息をつく。

と。

目の前を風と共に何かがかすめ、通り過ぎると同時に肉塊を奪っていった。カラスだ。獲物を掴んで、誇らしげに空へ登っていく。ただ杳然と、捉えられてしまった肉塊を見上げていた。逆光にきらめくカラスよりよっぽど、肉塊の方が目を引いた。

「あ」

肉塊は多少もがいたように見えた。そして次の瞬間、それぞれの糸が触手のように伸び、足元からカラスを包み込んだ。まるで突如咲いた艶やかな花に飲み込まれたように見えた。続

いて骨の碎ける音、筋肉が潰れる音が鋭く鼓膜をゆらした。目の前で黒い羽や血液が飛び散る。同時に生々しい臭いも辺りに広がる。

自身を運んでいたものを捕食し終え、飛ぶ手段を失い再び地上へ戻ってきた肉塊は、何事もなかったかのようにまた地面をにぎり、にぎりど回り回っていた。